

食と健康の最前線

福井県立大学 講堂

福井県吉田郡永平寺町松岡兼定島4-1-1

アクセス 【バス】JR福井駅西口バスターミナル1番のりば [27・37・38系統] 県立大学・大学病院行き
いずれも「県立大学」下車(所要時間:38系統 約40分)

対面・オンラインによるハイブリッド開催

参加希望の方は6/30(金)までに下記URLまたはQRコードより
【申込方法】申し込みください。
なお、オンライン視聴希望の方は、先着500名までといたします。

<https://forms.gle/65JVwT8ukUXFio2L6>



令和5年

7/7 金

13:00▶16:20

現代人の大きな関心に食と健康の問題がある。日本の食料自給率は36%程度で先進国とよばれる国の中では最低で、国内の生産者の高齢化のため農業や水産業の持続性自体が危機に陥っている。このような危機的な状況にありながら、高齢化社会の到来とともに食に対する関心は非常に高く、味だけでなく、栄養価、安全性、経済性などもその評価に加わっている。そのため、農学や水産学の分野では、いかに健康価値の高い、収益性のある食品をつくることができるかに、大きな関心が集まっている。そのためには、農学や水産学だけでなく、育種学や遺伝学、さらには栄養学や健康学なども加わり、様々な分野が融合して新しい学問分野を切り開くための研究が進みつつある。本シンポジウムでは、食と健康に焦点をあて、新しい研究の進展を紹介する。

13:00▶13:05

開会挨拶

福井県立大学学長 岩崎 行玄

13:05▶13:15

日本学術会議会長挨拶

日本学術会議会長 梶田 隆章 (日本学術会議会長・第三部会員、東京大学宇宙線研究所・教授)

13:15▶13:25

主催者挨拶

日本学術会議中部地区会議代表幹事 池田 素子 (日本学術会議第二部会員、名古屋大学大学院生命農学研究科教授)

13:25▶13:35

科学者との懇談会活動報告

中部地区科学者懇談会幹事長 松田 正久 (同朋大学学長)

13:35▶16:15

学術講演会

福井県立大学でのイネ育種への挑戦

～地方大学で遺伝子研究は役に立てるのか?～

三浦 孝太郎 (福井県立大学生物資源学部教授)

魚類特有のIgT抗体の粘膜免疫制御と養殖産業への応用

瀧澤 文雄 (福井県立大学海洋生物資源学部准教授)

健康につながる食行動を促進する要因の解明

～食べる力・生きる力を育むためのヒント～

小島 亜未 (福井県立大学看護福祉学部教授)

16:15

閉会挨拶

松原 宏 (福井県立大学地域経済研究所特命教授)

お問い合わせ

●日本学術会議中部地区会議事務局 (名古屋大学研究協力部研究企画課内)
TEL: 052-789-2039 FAX: 052-789-2041
●福井県立大学
TEL: 0776-68-8298 FAX: 0776-61-6013

主催 日本学術会議中部地区会議
共催 福井県立大学

<https://www.scj.go.jp/ja/area/index.html>

入場
無料
どなたでも
参加できます

講師プロフィール

講演
題目

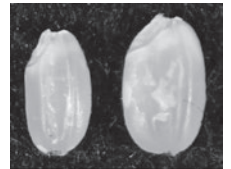
福井県立大学でのイネ育種への挑戦 ～地方大学で遺伝子研究は役に立ってるのか?～

福井県立大学生物資源学部教授 **三浦 孝太郎**



講演
要旨

福井県は稲作を中心とした農業県であり、福井県立大学における農学研究では地域貢献として農業への技術還元が期待されている。講演者はイネの収量性向上や品質向上に利用可能な遺伝子の基礎的研究を行い、論文発表を行ってきた。このような大学が実施する遺伝子研究が品種育成に繋がることは少なく、「大学は現場のニーズが分かっていない」、「地方の試験場が育種をする上で遺伝子の情報など必要無い」といった批判の声を聞くこともある。本講演では、福井県立大学で取り組んだイネ遺伝子研究と、これらの遺伝子を活用した新品種開発の試みについて紹介する。



コシヒカリ ピカツタ

プロフィール

専門は、イネを中心とした植物遺伝子研究。名古屋大学生命農学研究科で学位を取得後、名古屋大学研究機関研究員を経て福井県立大学に着任。イネの形態形成に関する遺伝子の基礎的研究を行いつつ、イネの新品種「ピカツタ」と「ふくむすめ」を開発した。これらの品種は福井県内で生産され、スーパーや直売所の店頭にて販売されている。

講演
題目

魚類特有のIgT抗体の粘膜免疫制御と養殖産業への応用

福井県立大学海洋生物資源学部准教授 **瀧澤 文雄**



講演
要旨

養殖魚の感染症対策として、ヒトと同様にワクチン投与による予防が推進されている。ワクチン投与により誘導される抗体は病原体などの異物の排除に関わり、魚類ではIgMが主要な抗体と考えられてきた。しかし、2005年に魚類特有のIgT (Tは真骨魚類Teleost由来) 抗体が様々な魚種で発見されて以来、これら2種類の抗体の機能の違いが議論されてきた。本公演では、講演者はこれまで取り組んできたニジマスのIgMおよびIgT抗体に関する研究のうち、特にエラなどの粘膜組織における抗体の役割について紹介するとともに、IgT研究の水産用ワクチンへの展開について紹介する。

プロフィール

専門は魚類免疫学。日本大学大学院獣医学研究科で学位を取得後、ドイツのフリードリヒレフラー研究所や米国のペンシルベニア大学で博士研究員として勤めた後、現職に就任した。ふくいサーモンや小浜よっぱらいサバの養殖事業に関わり、養殖魚の魚病診断などにも携わっている。

講演
題目

健康につながる食行動を促進する要因の解明 ～食べる力・生きる力を育むためのヒント～

福井県立大学看護福祉学部教授 **小島 亜未**



住民親子が食事をする風景
(許可を得て掲載)

講演
要旨

海や山に囲まれた自然豊かな環境である福井は、全国に誇る食材や食文化、食文化を支える伝統工芸品が有名である。平均寿命、健康寿命、幸福度ランキングともにトップクラスとなっており、県民の健康を育むための行動促進に関する研究はますます注目される。講演者はこれまで、特に健康の維持増進に大きく関与する食習慣の改善支援について、社会・心理学的な観点から検討し、論文発表をしてきた。食習慣は日々の生活の中で、時間をかけて育まれるため、いったん形成された食習慣を改善することは容易ではない。そこで近年では健康行動理論に基づいて、科学的にアプローチを行う支援が提案されている。本講演では、健康行動理論の紹介と健康的な食行動を促進する要因について、これまでの調査・研究の成果を紹介する。

プロフィール

専門は、公衆衛生看護学。行政保健師、産業保健師の経験をもち、生活習慣病予防を目的に、地域住民や企業の社員に対する個別または集団への健康支援や健康増進施策、健康経営などの計画・運営に関わってきた。神戸大学大学院人間発達環境学研究科で学位を取得し、食行動など人々の健康行動を促進する要因を探究し、健康自己管理への支援に貢献できるよう科学と実践の橋渡しを行う取り組みをしている。